

「口腔内科相談外来」と「心療内科・医療心理室」 との連携による歯科心身症患者への対応(北海道医療 大学歯学会第25回学術大会 一般講演抄録)

著者名(日)	安彦 善裕, 斉藤 正人, 山崎 敦永, 北所 弘行, 内田 暢彦, 神成 克映, 野呂 大輔, 田村 誠, 池田 和博, 永易 裕樹, 疋田 一洋, 木下 憲治, 藤井 健男, 舞田 健夫, 川上 智史, 松岡 紘史, 宮崎 友香, 志賀 満江, 佐々木 直, 坂野 雄二
雑誌名	北海道医療大学歯学雑誌
巻	26
号	1
ページ	52-53
発行年	2007-06
URL	http://id.nii.ac.jp/1145/00010024/

上顎急速拡大が上顎骨の成長に及ぼす影響

○渡邊玲佳, 上地 潤, 六車武史, 溝口 到
北海道医療大学歯学部歯科矯正学講座

【目的】上顎急速拡大装置は、本来、上顎骨の側方成長の促進を目的として用いられる整形装置であるが、上顎骨の前方成長を賦活化する可能性が指摘されている (Haas, 1961; Biederman, 1973)。本研究では、上顎急速拡大装置が上顎前方成長の促進する可能性があるのかについて、緩速拡大を適用した症例を対照群として用いて検討した。

【資料および方法】上顎拡大装置が適用された成長期の女児26症例の初診時と治療後の側面頭部エックス線規格写真 (セファロ) を用いた。初診時の平均年齢は、9歳2か月、治療後の平均年齢は10歳6か月であった。症例のうち、15症例には0.9mm径の矯正用線を用いたクワドヘリックス装置による緩速拡大を、11症例にはHyrax型

急速拡大装置を適用した。なお、すべての症例において上顎骨に前後的な整形力を加えるような装置は適用していない。

【結果および考察】(1)上顎骨の前方成長量に両治療群で差は認められなかった。(2)急速拡大では上顎骨の下方への偏位displacementが大きい傾向がみられた。上顎骨の下方偏位は、下顎骨の時計方向への回転および下顔面高の増大を生じるものと考えられる。本研究結果から判断すると、上顎骨の劣成長を伴うskeletal Class III症例において、上顎骨の前方成長の促進を目的として上顎骨の急速拡大装置を適用する必要性はないもの考えられる。

【結論】上顎急速拡大装置において上顎骨の前方成長を促進するような効果は認められなかった。

埋伏歯の牽引について～3症例から分かること～

○山口伸人, 山崎敦永*, 六車武史**, 溝口 到**
やまぐち矯正歯科
*北海道医療大学個体差医療科学センター
**北海道医療大学歯学部矯正歯科学講座

【目的】歯科矯正治療において、埋伏歯に遭遇する機会は少なくない。矯正治療上特に問題となってくるのは、萌出期を過ぎても萌出してこない永久歯である。処置方法は、開窓、牽引が大多数を占めるが、当該歯や隣在歯の抜去なども行われている。しかしながら状況背景が異なる埋伏歯はどのような観点から診断がくだされ、どのように処置されるのか統一した見解は得られてはいない。

そこで今回我々は、状況背景が異なる埋伏歯3症例を経験し、初診時所見、埋伏歯への対処、処置後の変化を比較検討したので報告する。

【症例】症例1. 初診時年齢12歳2か月の女子。3rdの埋伏を主訴に一般歯科より依頼され、3rd 歯冠部が2nd 根尖唇側部へ位置していた。3rd は、開窓術を適応し埋伏歯の牽引を行った。

症例2. 初診時年齢8歳4か月の男子。1st 未萌出を主訴に一般

歯科より依頼。32nd 埋伏、3rd 水平埋伏が認められた。開窓術を適応し埋伏歯の牽引を行った。

症例3. 初診時年齢14歳7か月の男子。5thの埋伏を主訴とし一般歯科より依頼。5thは、32nd間への転移しており、5thの牽引は不可能と判断した。口腔外科にて5thの隣在歯への影響を精査依頼。

【結果・考察】埋伏歯を牽引する場合、埋伏の位置確認、牽引方向を詳細に検討する必要がある。治療判断基準、治療指針については埋伏歯を歯種別に整理する必要があると思われた。

多様性を有する埋伏歯が的確な判断のもとに処置されることにより、咀嚼機能を健全に回復し良好な結果が得られることがわかった。

「口腔内科相談外来」と「心療内科・医療心理室」との連携による歯科心身症患者への対応

○安彦善裕*, 斉藤正人*, 山崎敦永*, 北所弘行*, 内田暢彦*, 神成克映*, 野呂大輔*, 田村 誠*, 池田和博*, 永易裕樹*, 疋田一洋*, 木下憲治*, 藤井健男*, 舞田健夫*, 川上智史*, 松岡紘史**, 宮崎友香**, 志賀満江**, 佐々木 直***, 坂野雄二**

*北海道医療大学個体差医療科学センター歯学部
**北海道医療大学心理学部

【目的】北海道医療大学病院で、一昨年「口腔内科相談外来」と「心療内科～医療心理室」が新たに開設された。口腔内科的疾患をもった患者のなかには歯科心身症患者も多く、両者の連携による治療が必要となることも多い。本発表では、連携により治療を行って

きた歯科心身症患者の概要について報告する。

【症例】平成17年9月～18年12月までに、北海道医療大学病院「口腔内科相談外来」を初診した患者の中で「心療内科～医療心理室」を紹介により受診した患者は125名であった。それらの口腔内科相

談外来での診断で最も多かったものは舌痛症、ついで口腔乾燥症であり、心療内科による診断は、身体表現性障害が70%以上を占めた。

【経過および考察】本邦で初の診療科名「口腔内科相談外来」は、歯科心身症患者の来院しやすい名称であり、「歯科心身症外来」や

「心療歯科」にかかわって使われるべき名称と考えられた。歯科心身症患者の大半は、心療内科では身体表現性障害との診断の範疇にはいることから、初診で対応する歯科医は身体表現性障害の診断基準を理解し、問診を聴取する必要があるものと思われた。

本学歯科内科クリニック地域支援医療科活動報告 第6報

○松原国男¹⁾、越野 寿^{1,3)}、千葉逸朗^{1,2)}、柳谷昌士¹⁾、平井敏博^{1,3)}

¹⁾北海道医療大学歯科内科クリニック地域支援医療科

²⁾歯学部口腔衛生学講座

³⁾歯学部歯科補綴学第1講座

本学歯学部附属病院は地域からの要望に応えるべく、平成12年11月に「地域支援医療科」を設置し、現在は、訪問歯科診療室所属の歯科医師2名と各科・部署からの担当者が診療等に当たっている。

今回は、平成18年1月から12月末までの「地域支援医療科」としての活動について報告する。

1. 訪問歯科診療の実績

訪問診療を実施した患者数は116名（平成17年同期間：134名）であり、延べ訪問診療回数は1182回（平成17年同期間：1301回）であった。訪問先については、高齢者・障がい者施設が524回（44.3%）で最も多く、居宅が382回（32.3%）、入院中の医科病院が276回（23.4%）であった。訪問先の地域別分布では、厚田村が492回（41.6%）、当別町が344回（29.1%）、江別市が202回（17.1%）、岩見沢市が114回（9.6%）、北村が13回（1.1%）、月形町が8回（0.7%）、浦臼町が7回（0.6%）、札幌市が2回（0.2%）であった。なお、施設・居宅の訪問回数については、全体で15%の減少を示したが、この原因は、多くの患者の診療内容が、義歯の製作やう蝕治療から口腔ケアや不定期の義歯調整等に移行し

たためと考えられる。なお、本年度から、人数は少ないものの、自閉症者自立支援センター（札幌市）と月形少年院（月形町）での歯科診療を担当することになった。

2. 学術活動

研究結果をもとに口腔・顎・顔面領域の機能を概説し、顎口腔系機能の全身の健康維持に果たす役割の重要性を啓発するための講演会（札幌市、当別町）への2回の講師派遣を行った。また、第17回日本老年歯科医学会学術大会（沖縄）において、活動内容を報告する発表を行った。

3. 歯の健康プラザ

医療施設としての「歯の健康プラザ」は、「食育」に関わるイベントを企画し、町民との交流を深めた他に、24時間テレビ愛は地球を救う（当別会場）に参加した。また、小学生に歯の大切さを理解させる体験学習「1日歯医者さん」を実施した。加えて、本学学生のコミュニケーション学習にも寄与する機能を発揮した。

今後も、「地域支援医療科」として、「治療」と「予防」との観点から、歯科診療と健康啓発活動に積極的に取り組む所存である。

ラット飼育飼料形態の血液指標への影響

○田中真樹、岩崎一生、横山雄一、越野 寿、平井敏博
北海道医療大学歯学部歯科補綴学第一講座

【目的】近年、咬合・咀嚼と身体・精神活動との密接な関係が報告されている。これらの中には、ラットにおける臼歯切除と粉末飼料飼育の脳・神経系への影響に関する報告もある。神経系への影響は、生体情報伝達系として共に機能している内分泌・免疫系へ波及することは十分に考えられる。

今回、われわれはラットの飼育飼料形態を変化させることによる血液指標への影響を生化学、内分泌および免疫学的に検討した。

【方法】5週齢および10週齢のWistar系雄性ラットを固形、粉末、液体の各々の飼料で飼育し、1週間間隔で採血を行い、一般血液検査とカテコールアミンを測定した。また、血清中の抗酸化能をESR装置によって、血漿中の炎症性サイトカインIL-6をELISA法によって測定した。

【結果および考察】一般血液検査の所見では、各飼育飼料群に変化は認められなかった。

カテコールアミンについては、粉末および液体飼料飼育によって、アドレナリンとノルアドレナリンに増加が認められた。

血清中の抗酸化能は、飼料変更後28日目に、粉末および液体飼料飼育では、固形飼料飼育に比して、低下が認められた。

IL-6は、粉末および液体飼料飼育ともに、5週齢ラットでは、14日目に増加し、10週齢ラットでは、28日目に増加した。

噛むことが習性であるラットを粉末あるいは液体飼料で飼育することは、ストレス環境下にあることが推測される。本研究の結果から、咀嚼運動の異常が免疫系に対しても影響を及ぼしていることが示唆された。

【結論】ラットの飼育飼料を固形から粉末あるいは液体へ変更することによって、カテコールアミンは増加し、血清中の抗酸化能は低下し、血漿中のIL-6には増加が認められた。